

現代若者のコミュニケーションスタイルに関する考察 ——メディアツール・コミュニケーションと 友達／恋人関係の現在——

紅 林 伸 幸・井 上 剛 男*
小 出 淳 子**・真 砂 恵***

A Study of Communication Style of the Contemporary Youth

—— Media Tool Communication and Friend / Lover
Relationship at the Present Time ——

Nobuyuki KUREBAYASHI, Takeo INOUE*
Junko KOIDE** and Kei MASAGO***

は じ め に

現代の若者はわからない、こんな声をよく耳にする。確かに、駅の階段に尻をつけて座り込んでいる若者や、アクセサリーのいっぱいついた携帯電話で見えない相手と大きな声で会話を交わしながら交差点を闊歩する若者にわからなさを感じることは、そのことにわからなさを感じるよりかはるかにわかりやすい。

若者をわからない者と捉えるまなざしは、歴史的に見れば昨日今日に始まったことではなく、若者と呼ばれる集団が登場した時代から始まっていたわけだが、我が国においては「新人類」という言葉が登場した1980年代以降、若者をわからない存在として認知するまなざしが広く社会一般に共有されるものになったと見てよいだろう。というのも、「新人類」が登場して以

来、わずか20年近くの間、「新・新人類」「オタク」「メディアキッズ」などを代表とする数え切れないほどの新しい若者の表現が生み出され、新たなわからない若者の出現が語り続けられているからである。つまり、若者のわからなさを強調する言説は、1980年代の「新人類」の登場以後、消えることがなく繰り返されてきているのである。

おそらくこれは若者がもはやひとつの若者として捉えられるものではなく、多様化していることの証であり、若者の間にさえ相互的なわからなさが一般化していることを物語っているものと思われる。1980年代に既に大人であった者から見ればそれ以降の若者はわからないし、1980年代以降を若者として生きた者には隣に座っている者が皆わからない存在なのである。若者は外から見てわからないと思われるだけでなく、彼ら自身も自分たちを捉えきれずにいる。

こうした状況を若者にもたらしたものは何なのか。この問いは今や現代社会を論じる際の最重要テーマの一つになっている。ましてや、子

* 関西大学大学院

** 本学卒業生

*** 本学卒業生

どもを研究の主題としている教育研究にとって、若者を研究することは、今子どもたちに何が起きているのかを知る上でも、子どもたちが置かれている生活空間の基本構造を探る上でも、さらには現在の若者を生みだした学校教育システムの問題点を反省的に捉えるためにも、極めて重要なことと言えよう。そして、そうした若者の姿を捉える視点として注目を集めているのが、彼らのメディアツールへの関わり方である。

現代の若者の特徴としては、直接的な他者との接触や交流を回避する傾向があり、他者への興味や関心が乏しく、深い人間関係を築くことを苦手としていることが指摘されることが一般的になっている。その一方で、次々と現れるメディアツールに敏感に反応し、それを使いこなす技術に長けている若者の姿に、彼らの他者との関係の取り方はメディアツールの影響を受けていると、若者とメディアツールが関係づけて語られることが多くなっている。確かに、様々なコミュニケーションツールが若者の世界に入り込み、それらを用いることはごく当たり前のことになっている。若者とメディアツールは密接に結びついていると見てよいだろう。では、どんな関係が実際に築かれているのか。メディアツールを用いたコミュニケーションの一般化は、若者の世界をどのようなものに変えたのか。

この考察のために、2つの質問紙調査を実施した。調査Aは現代の若者のコミュニケーションスタイルに関する調査（サンプルは高校生と大学生）、調査Bは現代の若者の恋愛規範と恋愛行動に関する調査（サンプルは大学生）

である¹⁾。本稿では、この2つの調査の結果から見えてくる若者のコミュニケーション世界を描き出してみたいと思う。ただし本稿は調査報告書の体裁はとらない。なぜなら、本研究で実施した2つの調査は、サンプル数が少なく、またその代表性という点でも若干の問題を抱えているからである。したがって、本報告は調査データの紹介を主眼に置かず、調査データを手がかりとして、若者のコミュニケーションのスタイル及びそれを成り立たせている規範を論理的に考察していくという形で議論を進めていく。

第1章 若者文化とメディアツール・コミュニケーション

1. 若者の生活とメディアツール・コミュニケーション

まず、若者の文化において、メディアツールを用いたコミュニケーションがどの程度一般的なものになっているのかを、調査データに基づいて確認しておきたい。

表2は若者のコミュニケーションツール（携帯電話、ポケットベル、自分専用の電話）の所有率を確認したものである。今回の調査は全国調査ではないため、ここでの結果によって日本の若者のコミュニケーションスタイルの一般像を描き出すことはできないが、若者がどのようにコミュニケーションツールを使用しているのかを大まかに捉えることには役立つだろう。まず次の3つを指摘しておきたい。第一はポケットベルの所有率は女性が高いが、携帯電話の所

表1 サンプル構成 (実数)

| | 調査 A | | 調査 B | | |
|---------|------|-----|----------|----------|---------|
| | 高校生 | 大学生 | 地方国立 A 大 | 地方国立 B 大 | 都内私立女子大 |
| 男 子 学 生 | 46 | 34 | 28 | 56 | — |
| 女 子 学 生 | 124 | 69 | 74 | 82 | 80 |
| 計 | 170 | 103 | 102 | 138 | 80 |

※ 調査実施は平成9年10月～11月

表2 コミュニケーションツールの所有率 (%)

| | 調査 A | | 調査 B | | | 調査 B | |
|---------------|------|------|----------|----------|---------|------|------|
| | 高校生 | 大学生 | 地方国立 A 大 | 地方国立 B 大 | 都内私立女子大 | 男子学生 | 女子学生 |
| 携 帯 電 話 | 8.3 | 25.3 | 37.3 | 21.0 | 55.0 | 32.1 | 35.6 |
| ポ ケ ッ ト ベ ル | 38.3 | 51.0 | 37.3 | 29.0 | 37.5 | 20.2 | 38.1 |
| 自 分 専 用 の 電 話 | 28.0 | 43.0 | 47.1 | 74.6 | 52.5 | 66.7 | 58.1 |

有率には男女差がないことである。これはポケットベルを女子高校生の文化とする一般の評価とも一致する。一方、携帯電話は性別を越えたツールであると言えることができるだろう。

第二にいずれのツールの所有も高校生よりも大学生に多い。ポケットベルの所有率が高校生よりも大学生の方が高いという結果は、ポケットベルを女子高校生の文化とすることと一見矛盾してみえる。しかし、ポケットベルがコミュニケーションツールである以上、一度所有したツールを大学生になったとたんに手放すということは考えにくい。確かにポケットベルの所有率は大学生の方が高いが、その使用頻度は高校生の方が高く、ポケットベルが女子高校生の文化として受け入れられてきたことを支持している。さて、ではなぜ大学生の方が総じてツールの所有率が高いのかということであるが、残念ながらこの点に関して十分な説得力ある説明を可能にするようなデータは得られなかった。大学生という存在のもつ、生活空間や交友関係の広がり、時間的・空間的自由度の高さ、あるいは特定の他者とのパーソナルな関係の親密化など、理由は様々に考えられるが、逆に特別な理由がないところに、こうしたツールの普及を支える何かがあるのかもしれない。

第三に大学生のツールの所有率には学校差がある。今回の調査では地方国立大学2校と東京都内の私立女子大学をサンプルとしたが、携帯電話の所有率は都内私立女子大学が圧倒的に高かった。大学別に性別構成、学年構成を統制変数として検討したが、性別と学年はその差を説明する主たる要因ではなかった。おそらく大学の地理的な条件や、生活空間・交友関係の地理的範囲などが関連しているのではないかと思われる。表3は部屋の電話の所有と携帯電話の所有をクロスさせたものであるが、2つの地方国立大学では負の相関が見られたが、都内私立女

子大学では相関はなかった。都内という地域性が部屋の電話と等価ではない付加価値を携帯電話に付与していることがわかる。

以上の結果から推察されるのは、第一に携帯電話やポケットベルといったコミュニケーションツールはすべての若者に普及しているわけではないということ、第二に携帯電話やポケットベルは単なる文化グッズではなく、あくまでコミュニケーションツールとして若者に受け入れられているということである。もちろんそのコミュニケーションツールとしての価値は単なる電話の代用以上の機能にある。しかし、その機能的な優越性は、それらのツールに所与のものとして備わっているというよりは、若者の関わり方によって作り出され、新たに付加されていくものと考えられる。

2. 若者の分化とコミュニケーションの分化

上では新しいコミュニケーションツールの所有について確認したが、次にその使用について確認してみたい。コミュニケーションツールと言うと、携帯電話やポケットベルといった新しいツールが想像されがちだが、若者の日常に最も根ざしているコミュニケーションツールと言えば「電話」である。若者のコミュニケーションへの批判的なまなざしは、携帯メディア以前に、電話を用いたコミュニケーションの一般化の中から生まれた。そこで、はじめに、携帯にしろ、据え置き型にしろ、電話で話すということがどのような意味を持っているのかについて検討する。

若者の電話の使用状況は、高校生では「4日以上かけない」と回答している者が6割を越え、毎日電話をしている者は1割をわずかに越える程度である。大学生になると、毎日電話をしている者が35%を越えるが、それでもほぼ同程度が「4日以上かけない」と応えており、電話

表3 自分専用電話の所有と携帯電話所有の相関

| | 地方国立 A 大 | | 地方国立 B 大 | | 都内私立女子大 | |
|--------|----------|--------|----------|--------|---------|--------|
| | 専用電話あり | 専用電話なし | 専用電話あり | 専用電話なし | 専用電話あり | 専用電話なし |
| 携帯電話あり | 20.8 | < 51.9 | 17.3 | < 34.3 | 54.8 | 55.3 |
| 携帯電話なし | 79.2 | > 48.1 | 82.7 | > 65.7 | 45.2 | 44.7 |
| 相関係数 | - 0.320* | | - 0.179* | | - 0.005 | |

がコミュニケーションの必須アイテムとなっていて、1回の電話にかける平均通話時間も、1時間を超えると応えている者は高校生、大学生ともに1割弱と、極端に長いわけではない。もっとも、10分以内の電話（要件電話に分類される）は高校生は31.0%、大学生はそれよりも多いがそれでも43.6%であり、多くの者が電話の中で連絡事項以外のコミュニケーションを交わしているであろうことは確かである。

しかし、以上の結果からは、電話に依存している若者像は浮かんでこない。そこで次に、会って話すよりも電話で話すことを好む傾向の高い若者とそうでない若者を操作的に分類し、電話を用いるコミュニケーションに、よりコミットしている若者がどのような若者なのかを検討する²⁾。

電話依存型の若者は非依存型の若者に比べて電話を使うときに「電話では顔を見ては言いにくいことが話しやすい」（依存72.0% > 55.4% 非依存）、「電話では開放的な気分で話ができる」（依存54.3% > 34.3% 非依存）と感じる者が多く、対面的なコミュニケーションよりも電話でのコミュニケーションをどちらかといえば好んでいる。しかし、彼らが実際に通話時間が長かったり電話をかける回数が多かったりする

のかとえば、必ずしもそうではない（表4）。電話依存型の若者は電話でのコミュニケーションを好み、積極的にコミットしているというよりはむしろ、コミュニケーションの機会自体が相対的に少なく、対面的なコミュニケーションを苦手としており、消極的な意味で電話への依存を強めているのである。以上の結果は、次の2つを示唆している。第一に、電話によるコミュニケーションは、ある層の若者にとっては対面的なコミュニケーションに對置され、対面的であることから起こるコミュニケーションの困難さを回避することに役立つと考えられているということである。これは、コミュニケーションを苦手としている者が、電話というメディアの力を借りれば、自分が周囲と違った関わりを持てるという期待を持っていることを示している。しかし、それが必ずしも電話を使用したコミュニケーションに積極的な態度をとらせることにはつながらないことには留意する必要がある。

第二に、電話によるコミュニケーションを得意とする若者は決して対面的なコミュニケーションを苦手としているわけではない。これは、上にあげた一部の若者が電話に期待している価値が、電話によるコミュニケーションの一般的な価値ではないことを示唆している。電話はい

表4 電話依存タイプの若者のコミュニケーション (%)

| | 高校生 | 大学生 | 電話依存型 | 電話非依存型 |
|---------------------------|------|--------|-------|--------|
| (電話では) 相手の表情が見えないので不安に思う | 41.5 | < 59.4 | 45.2 | 50.0 |
| (電話では) 顔を見て言いにくいことが話しやすい | 57.1 | 68.3 | 72.0 | > 55.4 |
| (電話では) 開放的な気分で話せる | 44.7 | 34.7 | 54.3 | > 34.3 |
| (電話では) 話し相手が近くにいるように感じる | 35.7 | 32.7 | 38.7 | 32.6 |
| 自分から積極的に友人をつくろうとする | 62.6 | 55.3 | 54.8 | 62.4 |
| 周りとの人間関係を大切にしている | 92.4 | 89.3 | 88.2 | 92.7 |
| 相手の反応を見ながら話をする | 72.4 | 71.8 | 81.7 | > 67.8 |
| 傷つくことをこわがっている | 72.9 | 78.6 | 77.4 | 74.0 |
| 自分の考えを相手に伝えるのが苦手 | 61.8 | 59.2 | 66.7 | 58.2 |
| 誰とも話したくない、一人でいたいと感じるときがある | 67.6 | 71.8 | 69.9 | 68.4 |
| 平均的な通話回数 | | | | |
| 1日に4回以上 | 1.2 | 2.0 | 1.1 | 1.7 |
| 1日に1～3回 | 13.5 | < 34.7 | 22.8 | 19.7 |
| 2～3日に1回 | 22.2 | 27.7 | 22.8 | 25.3 |
| 4日以上かけない | 63.2 | > 35.6 | 53.3 | 53.4 |
| 平均的な通話時間 | | | | |
| 0～10分 | 31.0 | 43.6 | 29.3 | 38.8 |
| 11～30分 | 33.3 | 33.7 | 33.7 | 33.7 |
| 31～60分 | 25.7 | 18.8 | 27.2 | 21.3 |
| 61～120分 | 9.9 | 4.0 | 9.8 | 6.2 |

まや誰でも接触可能なコミュニケーションツールであり、現代の若者のほとんどはそれをコミュニケーションの手段として利用している。重要なことは、それへの関わり方が人それぞれで、電話でないと話せないタイプもいれば、コミュニケーションの可能性を広げる手段として利用しているタイプもいるということである。つまり、電話を用いたコミュニケーションは若者のコミュニケーションとして一般的なものになっているが、それへの関わり方は一様ではないのである。そのスタイルの違いがどのようなものかについて、ここ数年の間に若者の間に急速に普及した携帯メディアの所有者の特徴から検討してみよう。

3. コミュニケーションスタイルの文化表示機能

「携帯メディアの所有」とコミュニケーションスタイルの相関を確認したところ、携帯メディアを持っている人の特徴として次の二点が明らかになった。第一に、彼らは社会的でコミュニケーションを得意としている。この側面は、特に、ポケットベルの所有の場合に見られる。ポケットベルを持っている人の多くが「自分から積極的に友人を作ろうとする」という自己意識を持っており、また「自分の考えを人に伝えるのが苦手だ」と感じている者が少ない。ポケットベルは、コミュニケーションの幅を広げる手段として活用されているのである。すなわち、携帯メディアは、コミュニケーションが苦手な人のツールというよりも、逆に、得意な

人に選ばれたツールなのである。

第二に、彼らは同性・異性の区別なく友人とつきあえる。この特徴は、携帯電話の所有の場合に顕著である。一緒にいて楽しいのは同性・異性のどちらの友人により当てはまるかという質問に対して、所有していない者は「同性の友人」であると多くが答えているが、所有している者の多くは「どちらとも言えない」と答えている。また、「真剣に語り合える」に対しても、「同性の友人」と答える割合は、携帯電話を所有する者よりも、非所有者の方が高いポイントになっている。しかも、有意な差ではないが、このような傾向は、ポケットベルの所有の有無においても見られる。「どちらとも言えない」ということは「同性・異性どちらの友人も当てはまる」ことだと解釈すると、携帯電話をはじめとする携帯メディアを所有する人は、友人のつきあいにおける性別の壁をあまり感じていないと結論づけられる。

以上の二点の特徴から、携帯メディアを持つことは、一般的な現代の若者の文化というよりも、もともとコミュニケーションを得意とする一部の若者の文化として顕在化していることがわかる。したがって、それは現代の若者に共通な文化として一括りに語るべきものではない。むしろメディアを利用するコミュニケーションスタイルが若者全体のものになっているが故に、新しく現れるメディアツールとの関わり方、すなわちその所有や使用が個々の若者のスペシフィックな文化を規定することになるのである。

表5 メディアの所有とコミュニケーションスタイル

(%)

| | | 携帯電話有り | 携帯電話無し | ポケットベル有り | ポケットベル無し |
|---------------------------|-----------|--------|--------|----------|----------|
| 自分から積極的に友人をつくろうとする | | 63.2 | 57.8 | 67.8 | 53.9 |
| 周りとの人間関係を大切にしている | | 92.1 | 90.3 | 93.0 | 89.4 |
| 相手の反応を見ながら話をする | | 71.1 | 72.8 | 70.4 | 72.8 |
| 傷つくことをこわがっている | | 71.1 | 75.1 | 71.3 | 77.5 |
| 自分の考えを相手に伝えるのが苦手 | | 65.8 | 60.8 | 51.3 | 68.2 |
| 誰とも話したくない、一人でいたいと感じるときがある | | 71.1 | 69.6 | 66.1 | 70.9 |
| 一諸にいと楽しい | 同性の友人 | 34.2 | < 63.1 | 53.9 | 63.6 |
| | どちらとも言えない | 52.0 | > 33.6 | 42.6 | 31.8 |
| | 異性の友人 | 13.2 | > 3.2 | 3.5 | 4.6 |
| 真剣に語り合える | 同性の友人 | 60.5 | < 74.7 | 69.6 | 76.2 |
| | どちらとも言えない | 28.9 | > 22.6 | 27.0 | 20.5 |
| | 異性の友人 | 10.5 | > 2.8 | 3.5 | 3.3 |
| よく電話をする | 同性の友人 | 52.6 | 67.1 | 60.9 | 68.0 |
| | どちらとも言えない | 34.2 | 24.1 | 27.8 | 23.3 |
| | 異性の友人 | 13.2 | 8.8 | 11.3 | 87.0 |

そして、そのように示される個々の文化は、現代の若者文化内の差異を表す。おそらく、若者文化においてコミュニケーションツールが果たしている機能として、こうした意味での表示的な機能を指摘しておくことは重要であろう。コミュニケーションツールの使用自体が彼らの文化の指標として表示的に機能しているのである。

4. コミュニケーションスタイル・アイデンティティ

若者にとって、コミュニケーションスタイルは個々の文化の表示的な機能を果たしているが、若者のコミュニケーションにはもう一つ忘れてはならない重要な側面がある。コミュニケーションすること自体がその人のアイデンティティに関わっていることである。

現代の若者は、それぞれの文化の違いを越えて「周りとの人間関係を大切にしている」(高92.4%, 大89.3%)が、彼らが人間関係を大切にするのは、他者を第一に尊重するという意味でのものとは違っている。彼らが友人の条件としている「悩んでいるときに頼りにできる」「一緒にいると楽しい」「やさしい」「自分のことを理解してくれる」といった項目は、彼らが友人に自分の存在を受け入れてくれる、よき理解者であることを求めていることを示している。彼らはそんな友人と関係を築き、彼らとの人間関係を大切にしているのである。つまり、彼らが人間関係を大切にしているということは、自分のアイデンティティを認めてくれる存在が自分の周りにいることを求めていることの言い換えなのである。

もちろん、コミュニケーションすることが自己アイデンティティと結びつくのは、現代の若者に限られたことではない。吉見俊哉が「コミュニケーションするという行為は、あるメッセージを伝達する行為であると同時に、そのメッセージを伝達しようとする自分の存在を、メッセージを受容する相手に受け入れさせる営み」(p. 121)であると述べるように、コミュニケーションすることはそもそも自己アイデンティティの確立と密接に結びついている。しかし、現代の若者の場合、彼ら一人ひとりのコミュニケーションスタイルが自己と他者の関係

を築き、維持するための指標として機能するという意味で特徴的と言えるだろう。それ故に、メディアツールという媒介項を持つことによって分化した若者の多様なコミュニケーションスタイルは、彼ら一人ひとりのアイデンティティの表出として意味を持つ。そして、その差異が彼らの文化的な位置を表示することになるのである。

第2章 現代の若者におけるコミュニケーションスタイルの規範

前章では、現在の若者のコミュニケーションスタイルが、彼ら一人ひとりの文化を表示し、二重の意味で自己アイデンティティに関わっていることを述べた。しかし、メディアツールコミュニケーションが若者間の文化の差異を示す指標となっていることは、若者全体が既にメディアツールを用いたコミュニケーションの世界に巻き込まれていることを意味する。本章では、彼らが巻き込まれているそのコミュニケーション世界がどのような規範をもっているのかを確認する作業を行いたい。

1. コミュニケーションスタイルの量的な規範

現代の大学生の多くは「周りの人とよい関係が築けている」(90.0%)と言う一方で「今よりもっと友達がほしい」(76.3%)と考えている。彼らの交友関係は広く、友人の絶対数に不足があるとは考えにくい。現代の大学生は、同性の友人を4人以上持ち、しかも異性の友人も数人持っているのが一般的である。これは、ゲーリィ・ガンバートが言うように、メディアを利用するコミュニケーションツールによってコミュニケーションをする空間的な制約が取り除かれ、「人間同士の話し合いに『同じ場所にいること』という条件が不要になった」(p. 247)結果と考えることができる。メディアツールを利用するコミュニケーションは、コミュニケーション空間を拡大させる特質を持っているため、それを自分たちの日常の一部として受け入れた現代の大学生が持つ友人の数は必然的に多くなったのである。したがって、今の友達の人数に不満があるとは考えにくい。彼ら

は友達がいらないからもっと友達がほしいのではなく、友達はいるがもっと友達がほしいのである。

現代の若者は「電話的ふれあいにおける自己と他者の存在の希薄さ」を感じていると吉見俊哉 (p. 134) が言うように、コミュニケーション空間の拡大は他者との関係性を希薄化させる結果を生み出す。したがって、この他者との希薄な関係性で構成された日常を変革する手段として、「今よりもっと友達がほしい」という反応が若者に表れているのだと説明することも可能である。しかし、対人関係の希薄化を感じているはずの大学生の多くは、「現在の生活に満足している」者が69.4%、「周りとの人間関係を大切にしている」者が91.2%と、現在の生活及び人間関係に一定の満足を示している。彼らは満足の中で新たな友人関係を模索している。この観点に立てば、友人の量を更に増やしたいという彼らの願望は、自己の変革よりもむしろ、自己を含めた現状の満足を維持する必要性という側面から捉えるべきであろう。

ここで、彼らが友人との関係において「親友であっても立ち入るべきでない領域がある」(93.8%) と考えるなど、友人を拘束したり強引に深く関わったりすることを避ける傾向を持っていることに注目したい。彼らが対人関係で自らが「傷つくことを怖がっている」(75.1%) と感じていることを併せて考えるならば、彼らが他人に対して深く関わることを避けようとするのは、他者を尊重しようという意識からのものではなく、相手の自由も保障する代わりに自分に対してもよい干渉はしてほしくないという、コミュニケーションにおいて自分自身の自由を求める気持ちを表わしているのではないだろうか³⁾。現代の若者はコミュニケーションにおける自身の自由にとりわけ敏感である。彼らは「ありのままのあなたを認めてくれている」若者を自らの意志で選択し、友達の一人に加える自由を持っている。そして、友達以外の若者を排除する自由を持っている。

こうした友達選択の自由を持つ彼らには、自分の周りに自分の満足を保証してくれる友達とその予備群が必要であり、そのために友達予備軍を含めた友人の絶対量が重要になるのである。

そこに位置づけられた人はいつでも友達として彼らにより近いポジションに移動することができるし、いつでも排除されうるのである。こうした友達選択の自由を前提とした現在の満足を維持するために、彼らはますます大きな友人の絶対量を必要とすることになる。しかもここには一定数の新参者が含まれていなければならない。その意味で、ポケベルに代表される携帯メディアの若者の世界への普及は必然であったと言えよう。コミュニケーションにおける主体性と選択の自由が保証され、膨大な数の友人をそれぞれの差異を明示化することなく保持することを可能にし、時には新しい友達との出会いの機会をも提供してくれるのだから。

以上のような友人の数を増やそうとする現代の若者のコミュニケーションの規範は、青年期の心理的特性のみに規定されているわけではない。コミュニケーション空間を拡大させるコミュニケーションツールの特徴が、他者による評価に対する関心を導き出し、そこで正当化される自己アイデンティティの関数として友人の数をを用いるコミュニケーションスタイルを一般化させたのではないだろうか。重要なポイントは三つある。第一に、現代的なコミュニケーションツールが、コミュニケーション空間を拡大させたこと、第二に、友人の数の増加が他者との関係性を拒否する自由を可能にしたこと、第三に、自己アイデンティティの保証が友人の数によって維持されるという規範が若者全体に共有されるようになったことである。このようなコミュニケーションスタイルの規範は、他者との関係性を希薄化させてしまうだけでなく、友人の数という際限のない指標を採用することによって自己アイデンティティを常に不安定へと導くというパラドキシカルな効果を伴っている。けれども、これらの側面もまた、現代の若者が友人の数を指標とするコミュニケーションスタイルの規範に従うことをますます触発し、結果的にこのスタイルの規範を正当化するのである。

2. コミュニケーションスタイルの質的な規範

コミュニケーション空間の拡大は、現代の若者にとって友人の数への関心を高めさせること

になったが、その結果の一つとして彼らの周りには多くの友人が様に横並びになったコミュニケーション世界が作り出された。彼らは一方ではその中で友人とのコミュニケーションを通じて自己アイデンティティの確認を行い、他方でその世界そのものを自らのコミュニケーションスタイルとして呈示することで、他者との関係を築いていく。友人の数は一方では自己アイデンティティの確認を可能にしてくれる友達の母集団を意味し、一方では彼がどのようなコミュニケーションスタイルを持っているのかを表示する格好の指標として機能する。彼らは、友人の数を通じて二重の意味でアイデンティティの確認を行うのである。しかし、友人の数という指標は、その際限のなさによって不安定さを所与としている。更に、数への関心によって作られたコミュニケーション世界は、親友と友達とその予備軍が横並びになった曖昧な空間を用意する。友人の数という量的な規範は、アイデンティティの確かさの源でありながら、結

果として若者のコミュニケーション世界を不安定で曖昧なものにするのである。しかし、その不確かさが若者をいっそう量的な規範からなるコミュニケーションゲームへと駆り立てる。ゴールのないゲームがこうして続いていく。

しかし、若者の世界で繰り上げられるコミュニケーションゲームは、「もっとたくさんの友達を」という数のゲームばかりではない。不特定多数の友人とは違う「親友」や「恋人」という特別な存在への格別な関心も、若者のコミュニケーションを特徴づけるものとして重要である。

現在、ほとんどの大学生は、異性との恋愛を経験している（77.6%）。そして、恋愛に対して、「恋愛をしていると周りの人に優しくなれる」「恋愛がエネルギーになる」「恋愛している自分が好き」といった肯定的な感情を抱いている。彼らは、恋愛をすることで、自分が恋人に受け入れられているという安心感を得、恋人との信頼関係から自信を得る。もちろん、自己を

表6 若者の恋愛観・恋愛行動・恋愛規範 (%)

| | 男子学生 | 女子学生 | 全体 |
|------------------------|------|--------|------|
| 恋愛観 | | | |
| 恋愛をしていると周りの人に優しくなれる | 51.8 | < 73.1 | 67.5 |
| 恋愛が自分のエネルギーになる | 79.5 | < 90.2 | 87.4 |
| 恋愛に損得感情はない | 59.0 | 64.1 | 62.8 |
| 恋愛には努力が必要だ | 84.3 | 87.6 | 86.8 |
| 恋愛には隠し事も必要だ | 73.5 | 71.2 | 71.8 |
| 恋愛は何となく始まる | 59.0 | < 77.7 | 72.8 |
| 恋愛をすることは面倒なことだ | 48.2 | > 37.2 | 40.1 |
| 恋愛をしている自分が好き | 44.4 | < 73.8 | 66.2 |
| 恋愛をすると他のことが手につかなくなる | 31.3 | 36.9 | 35.4 |
| 恋愛をすれば、相手との結婚を考えるのが普通だ | 25.9 | 26.6 | 26.4 |
| 恋愛をすれば性関係を持つのが普通だ | 69.1 | > 55.8 | 59.2 |
| 恋愛行動 | | | |
| 恋人には隠し事をしない | 54.3 | < 67.1 | 63.8 |
| デートの費用はワリカンにする | 60.5 | < 77.4 | 73.1 |
| 恋人と友達ぐるみのつきあいをする | 53.1 | 61.7 | 59.5 |
| 恋人と、昔付き合っていた人の話をする | 32.1 | < 46.6 | 42.9 |
| 恋人とのつきあいを優先している | 53.1 | 52.3 | 52.5 |
| 恋人を束縛したくなる | 42.0 | 43.8 | 43.4 |
| 自分の方から連絡をとる | 61.7 | 54.9 | 56.6 |
| 恋人のことはすべて知りたい | 58.8 | 61.3 | 60.6 |
| 会えばHをする | 26.3 | 22.8 | 23.7 |
| 恋愛規範 | | | |
| 恋人以外の異性と二人だけで会う | 85.7 | 83.9 | 84.4 |
| 恋人以外の異性に悩みの相談を持ちかける | 89.3 | 91.5 | 90.9 |
| 恋人以外の異性とキスをする | 37.0 | > 21.2 | 25.2 |
| 恋人以外の異性と性関係を持つ | 28.4 | > 6.8 | 12.3 |
| 恋人以外の異性を好きになる | 59.3 | 65.5 | 63.9 |

肯定できるという恋愛が持つこれらの価値は、不特定多数の友人を持つことでも可能である。ダックが「人間関係を持つことの最大の成果は、何かに所属しているという帰属感、それと『同盟感』にある」(p. 25) と指摘するように、友人関係も恋人関係も人間関係であると捉えれば、それらは機能的には等価である。当事者の自己アイデンティティを保証する働きをするという点では、友人と恋人には本質的な違いが存在しないにもかかわらず、現代の若者は恋愛を経験し、またそれに価値を見出しているのである。おそらく現代の若者が恋愛を志向する背景には、友人関係にはない恋愛独自の規範が存在するからであろう。

確かに、恋愛そのものに魔力めいた魅力があると考えerことはできよう。あるいは恋愛には結婚という、友人にはない付加価値がついていることも重要かもしれない。また、大学生の半数以上が「恋愛すれば、性関係を持つのが普通である」(59.2%) と答える一方で、「恋人以外の異性と性関係を持つ」(12.3%) 「恋人以外の異性とキスをする」(25.2%) ことには否定的な態度を示していることから、性行為に恋愛関係の独自性が見出せると説明することも可能かもしれない。しかし、彼らの恋愛観に関してより注目すべき点は、「恋愛をすると他のことが手につかなくなる」(35.4%) 「恋愛をすれば、相手との結婚を考えるのが普通だ」(26.4%) という認識が少数派であり、しかも「今の恋人よりもいい人と出会ったら今の恋人とは別れると思うか」という質問に対して多くの若者が「別れる」(70.5%) という反応をしていることである。彼らはもはや恋愛に、現在の恋人という他者との関係に絶対的な継続性が期待できないことを知っているのである。このような恋愛の神話が崩壊した現代において、恋愛関係はいつ壊れてもおかしくない危うさを孕んでいる。したがって、彼らの恋愛は努力を必要とする。更に、彼らの多くは自身が「恋人以外の異性を好きになる」可能性に自覚的ですらある。当然相手も同じである。その不安定な関係を維持していくために、彼らは「恋人以外の異性に悩みの相談を持ちかける」(90.9%) 「恋人以外の異性と二人だけで合う」(84.4%) などして恋人

以外の異性を複数キープし、その心を癒やすとともに、新たな恋人としていつでも交換可能な位置に置いておくのかもしれない。それは、ちょうど彼らが友人関係において友達予備軍を含む友人の絶対量を確保しているのとまったく同じ構造なのである。

こうした彼らの恋愛行動は恋愛がその延長に結婚を伴っているという従来の恋愛観、すなわち「恋愛—結婚モデル」がもはや過去のものとなっていることを示している。彼らは恋愛が新しい恋愛に連結し、果てしなく連続する「恋愛—恋愛モデル」の中で恋人と出会っている。このモデルのもとでは結婚は恋愛のゴールではなく、恋愛と恋愛の接続点における一つの痕跡にすぎないのである。彼らにとっては、現在の恋愛の終着点にある結婚よりも、恋愛の向こうの新しい恋愛や、結婚の向こうのもう一つの恋愛の方がはるかに蓋然的なのである。しかし、それでもなお、若者たちは恋愛に特別な関係を求めずにはいられない。それはなぜなのだろうか。

恋愛関係は、友人関係同様、他者との関わりを通じて自己の存在を肯定できるという機能を持つが、友人関係とは違い、その機能を恋人という特定の人間によって実現する。恋愛関係は、数を自己アイデンティティの関数とする量的な規範ではなく、恋人という特別な他者の存在を自己アイデンティティの指標とする若者コミュニケーションの質的な規範なのである。この質的な規範は、恋人という単独の存在を指標とするため、恋人である他者との関係性を親密にし、一つひとつの相互行為に特別な意味を持たせる。ここに、恋愛関係の特殊性がある。

しかし、この特殊性は友達関係に対する優越性を意味するわけではない。なぜなら、恋愛関係は他者への強い関与を前提としているが故に、その関係の中にいる者は、過剰な関与と不関与の中で、恒常的な安定を手に入れることができないことをしばしば経験するからである。したがって、現代の恋愛は自己のアイデンティティの維持・確認を数の指標によって保証する友人関係にとってかわることができない。その結果、若者はどちらか一方のゲームに参加するのではなく、2つのゲームに同時に参加することで、

不断に、その時々的心を癒し、自身のアイデンティティを確認していくことになる。つまり、2つの規範は、若者のコミュニケーション世界において補完的なのである。どちらか一方だけで、彼らは満足しない。しかし、両規範は併存することによって、互いに他を浸食し、若者をますます不安定なコミュニケーション世界へと導いていくのである。

3. 2つのスタイル規範の相互浸透

2つのスタイル規範は互いに他に影響を及ぼしている。量的規範は質的規範に次の2点で影響を及ぼしている。第一に恋人とそうではない異性の友達の境界を曖昧にする。第二にこのことが結果的に自分自身の他者にとっての特別な存在としての地位をも浸食し、自己アイデンティティから確かさを奪い去る。一方、質的規範は、量的規範が実現する多数の友人のいるコミュニケーションの質的な側面を希薄な関係として主題化する。もちろん両者の関係はマイナスの作用ばかりではない。特に、友達の数は恋愛関係を作る前提条件ともなる。しかし、この前提条件が存在すること自体が、恋人を取り替える可能性を両者に保存し、若者から「恋愛関係」の絶対性を奪い去っているのかもしれない。

NHK スペシャル『ベルトモ』⁴⁾ は、この2つの規範が相互浸透している若者の世界を見事に描き出していた。そこに登場した高校生直樹は、新しく購入したポケットベルでベルトモを200人つくるという目標を立て、情報誌に広告を出す。情報誌の発売日、彼のポケットベルには多くの若者からメッセージが入る。彼はその中から、女性の発信者だけを選び、手帳にベルの番号を書き込んでいく。彼はポケットベルを使って一人ひとりについてより詳しい情報を集め、彼女たちが自分に見合った女性であるかどうかを確認し、一喜一憂する。メッセージのやりとりが繰り返される内に、みきという一人の女性とのメッセージのやりとりが頻繁になる。彼は彼女に会いたいというメッセージを送り、会う約束を取りつける。初めてのデートを終えた帰り、彼のポケットベルにメッセージが入る。「愛してるよー**みき*」。メッセージを見て喜ぶ彼と取材班の会話が面白い。

取材「ベルトモ、200人作ろうって雑誌に入れてたじゃない?」

直樹「そうだったですけど、ミキちゃん気に入っちゃったんで、」

取材「それでいいか(共感的に)」

直樹「それでいいです。もうその200人っていうの、また別の機会で、頑張ります。とりあえず今はミキちゃん頑張ります。」

ベルトモ200人という目標は、一人の特別な存在の出現によって取り下げられた。「ベルトモ200人」と「ミキちゃん」は直樹にとって等価であった。しかし、彼は別の機会があることを知っている。彼はとりあえず今はミキちゃんと頑張る。しかし、その関係の終わりは予感されている。そのときまでのしばしの間、ベルトモ200人という目標は、脇に置いておかれるのである。

第3章 メディアツールが作り出す恋愛のスタイル

前章では、友人関係と恋愛関係を、若者のコミュニケーション世界の異なる2つの規範によって構成された局面として捉え、そのそれぞれについて論じてきた。本章では、2つの規範の交錯が顕著に見られる「恋愛」に特に焦点を当てて議論を進めてみたい。

1. 現代の若者における恋愛規範の二重構造

山田昌弘は、恋人を異性の友人などの他の人間関係から区別する基準として、「相手とのコミュニケーションの位置づけから区別する」排除規範と「相手とのコミュニケーションの内容から区別する」恋愛・恋人規範の二つをとり上げている(山田 1992)。前章で述べたように、現代の若者は性関係の有無などを基準とした恋愛・恋人規範からまったく解放されているわけではないが、「恋人以外の異性を好きになる」ことや「今の恋人よりいい人と出会ったら今の恋人とは別れる」ことに概ね肯定的な若者の意識は、そうした恋愛の規範が揺らぎつつあることを示している。しかも、山田が「現代の恋愛には、少なくとも、『親密性を保証するものとしての恋愛』『社会的な価値としての恋愛(そ

の中には、SEX も含まれる)』その中間に『結婚の手段としての恋愛』という三要素があり、各々個々に分離しかけているのだ」(山田 b p. 51)と指摘するように、現代は恋愛の規範そのものが多様化している現実もあり、若者の恋愛は曖昧で不安定なものとなっている。恋愛規範の揺らぎは若者の世界の極めて重要な現象の一つであり、調査結果にもいくつかの興味深いデータが確認されているが、それを云々することが本稿の目的ではないので、ここでは次の点だけを指摘するにとどめたい。

表7に示すように、現在異性と交際している者でさえ、5割以上が、現在の恋人よりもいい人と出会ったら今の恋人とは別れると回答しており、交際中に「恋人以外の異性を好きになる」や「恋人以外の異性と性関係を持つ」ことを「かまわない」と考えている者の割合は、恋人のいない若者の数値とほとんど変わらない。これは、恋人と付き合っているという事実が、恋愛規範を若者に突きつけることになるわけではないということを示している。むしろ逆に、恋愛の体験が仮想の恋愛の中で彼らの行動を規制していた仮想の恋愛規範を崩すことになっているように思われる。また、過去に交際していた現在恋人のいない若者に、「恋人以外の異性とキスをする」ことを「かまわない」と考える者が多いことは、恋愛が絶対的な継続性を持たないことを実際に体験することが、恋愛規範の揺らぎをさらに進めるように作用していることを予感させるものである。つまり、恋愛すればするほど、彼らは恋愛の規範を絶対的なものとして体験できなくなるのである。恋愛の規範を絶対的なものとして体験できない彼らは、当然、恋愛そのものを絶対的なものとして体験できない。彼らは誰かを愛すれば愛するほど、確かさ

を保証されないその関係に寂しさを感じ、心の癒しを別の他者との関係に求め、ますます規範を揺るがせていくのである。

さて、ここまでの議論から現在の若者が体験している恋愛コミュニケーションのスタイルの特徴として次の2つが指摘できる。第一はこれまで恋愛を規定してきた規範が揺らぎ出し、新たな規範に取って代わられつつあること、第二は若者の恋愛が基本的に恋愛—恋愛モデルに基づくものになっていることである。更に、以上の2点に加えて、他者の拘束と主体の自由の2つが新しい規範として彼らの恋愛のスタイルを規定していることを指摘しておかねばならない。

恋愛は、山田が指摘するように、恋人以外の人への排他性と恋人との特別な関係という二つの規範によって恋愛関係にある両者の行動を拘束する。性関係を持てる相手を交際相手に限定し、性関係を持つ対象を選ぶ自由を拘束する。そして、性関係は恋人同士だけにしか許されないという規範は、自分が現在特定の他者と恋人関係にあるという自己アイデンティティを作り出すだけでなく、その関係性を交際相手や自分自身に強制する。けれども、恋愛関係においても若者は、友人関係と同じように、他者を拒否する自由が保証されることを要求する。「恋人以外の異性を好きになる」ことや「今の恋人よりもいい人と出会ったら今の恋人とは別れる」ことを認める若者の姿には、単なる恋愛規範の揺らぎ以上に、今までの恋愛規範のようにお互いの関係性を拘束することでアイデンティティを確認しようとする一方で、自分が恋人を乗り換える自由によって主体性を確保しようとしている様子が感じられる。つまり、現在の若者は恋愛においても他者との関係に含まれる拘束感を

表7 交際経験と恋愛規範の揺らぎ

(%)

| | 現在交際中 | 過去に交際経験がある | 交際したことはない |
|----------------------------|-------|------------|-----------|
| 恋人を乗り替える意志がある | 56.0 | < 80.0 | 77.1 |
| 恋愛をすれば相手との結婚を考えるのがふつうだと思う | 36.0 | > 19.4 | 21.7 |
| 恋愛をすれば性関係を持つのがふつうだと思う | 67.8 | 60.5 | > 43.5 |
| 恋人以外の異性と2人だけで会うことはかまわないと思う | 79.5 | 88.5 | 84.5 |
| 恋人以外の異性に悩みの相談を持ちかける | 84.6 | < 96.2 | 91.5 |
| 恋人以外の異性とキスすることはかまわないと思う | 21.4 | < 35.7 | > 12.9 |
| 恋人以外の異性と性関係を持つことはかまわないと思う | 14.5 | 14.0 | 7.1 |
| 恋人以外の異性を好きになることはかまわないと思う | 61.5 | 66.7 | 63.8 |

拒否する自由を確保しようとしているのである。

こうした他者との関係を拒否できる自由を重視する側面が、携帯メディアを中心にしたメディアツールの特質と一致していることは言うまでもない。現代的なメディアツールは、吉見俊哉が言うように「電話的ふれあいにおいて、相手の顔や姿をさらけ出さずにすむ」(p. 134)ため、電話に出たくなければ出なくてよいという、コミュニケーションすることそのものを一方的に拒否できる装置である。恋愛規範の揺らぎは、拘束することを規範とするかつての恋愛関係の絶対性が、他者とのコミュニケーションを拒否する自由を保証するコミュニケーションツールによって開かれた新しいコミュニケーションゲームの中で変形したものを見ることができるのではないだろうか。

現代の若者は、他者とのコミュニケーションを拒否する自由という規範と、性関係を媒介に他者を拘束するという規範を持っている。他者とのコミュニケーションを拒否する自由は、恋愛関係に含まれるお互いを拘束するというもう一方の規範を部分的に否定しているにもかかわらず、矛盾するこの2つの規範が両立できるのは、他者の拘束という恋愛コミュニケーションの規範が、お互いを拘束するのではなく、他者である相手に対する一方的な拘束を意味しているからである。しかも、彼らはそのように恋愛において他者を拘束していることに無自覚でいられる。彼らは表面的には「束縛しない」と言明しつつ、行動として他者を束縛するのである。

この他者を拘束することに無意識になれるという側面もまた他者を一方的に拒否できることとともに現代的なメディアツールが彼らに保障している機能の一つである。携帯電話や自分専用の電話を所有することで、彼らは「いつも誰かとつながっていらられるような気持ちになる」(富田 p. 63)。彼らは主観的にはいつでもメディアツールを通じて誰かを束縛している。しかし、携帯メディアを所有することで、若者は他者を束縛する権利を得たわけではない。彼らが手に入れたのはそれを意識せずに行うことである。彼らはいつも一緒にいるわけではないので、相手を拘束しているとは意識していないが、いつでも電話ができ、コミュニケーションの回

路をつなぐことができることで、常に相手を未来完了型的に拘束している。コミュニケーションツールの持つ他者を無意識に拘束できるという特質は、本来なら相互的な拘束によって成立するはずの恋愛関係を、他者である交際相手を一方的に拘束する関係へと変貌させたのだ。

現代の恋愛コミュニケーションは、他者を一方的に拒否できる自由と他者を一方的に拘束する権利という二つの規範からなる。しかも、この新しい恋愛規範の二面性は、現代的なコミュニケーションツールの特質と結びついて強化されている。若者は、コミュニケーション空間を拡散させる現代的なメディアツールを使用することで、自身の恋愛関係を操作しているのである。

ただし、このような操作が可能であるためには、束縛と拒否の対象である恋人という他者の他に、自分の都合にあわせて恋人を束縛も拒否もできないときにいつでもその恋人の代わりとなる別の他者が確保されていなければならない。現代的な恋愛のコミュニケーションは、代わりとなりうる別の他者を選択できるだけの友人の量が確保されていることを前提にしているのである。現代の若者は、恋愛規範の二重構造を保証する「恋人以外の異性を好きになる」ことや「今の恋人よりいい人と出会ったら今の恋人とは別れる」ことを認める一方で、「恋人以外の異性に悩みの相談を持ちかける」、「恋人以外の異性と二人だけで合う」などして恋人以外の異性を複数キープしている。この現象は、恋人以外の異性を複数キープできる者だけが、恋人を乗り換える権利を持てることを示し、このように恋人を乗り換えられることが、現代の若者にとっての恋愛スタイルであることを示唆している。つまり、現代の恋愛コミュニケーションは、現在の恋人以外に、次の恋人となる可能性を持つ候補生を確保しておくことや、いつでも新たな恋人を作れる能力を持つことを潜在的に規範化させていると考えられるのである。

コミュニケーション空間を拡散させる現代的なメディアツールの特質は、他者を一方的に拒否できる自由と他者を一方的に拘束する権利という二重構造を編みだした。そして、現代の若者は、この構造を操作するようになり、新しい

規範が彼らの恋愛のスタイルを規定することになった。しかし、そのスタイルが維持されるためには、友人の数が確保されていなければならない。この点に関して、若者のコミュニケーションのもう一つの規範が重要な役割を果たすのである。

2. 若者文化におけるメディアツールの受容と恋愛規範の変化

前節ではメディアツールの特質が新しい恋愛規範を若者のものにしたことを強調したが、逆の側面もまた重要である。つまり、恋人という他者を自己中心的に操作できるコミュニケーションツールを若者は必要としているという側面である。

若者が他者を操作するためには2つの条件が必要である。第一は恋人のポジションに移動可能な他者が複数名存在すること、第二は恋人との親密な関係とそれ以外の他者との親密な関係の同時進行が恋人に知られないことである。

恋愛コミュニケーションの中心的な規範は特定の他者との関係性という質的なものであるが、この規範は既に量的な規範の浸透を許している。他者を操作することへの志向は複数の友人の存在を前提にしているため、その数を確保するための他者への気遣いや自己抑制が必要となり、過剰な自己意識を強いられる。他者を操作する恋愛には、隠し事も必要だし、努力も必要なのである。

この自己意識は、結果として、相手に気を使わなくてよいという特質を持つ現代的なメディアツールへの関心をますます高めることになる。特に、ポケットベルは富田の指摘のように「お互いに自分の生活ベースを乱すことなくコミュニケーションできる」(p. 28) というメリットを持つことから、このような気遣いや自己抑制をせずに、他者との交流を可能にするツールとして絶好である。ポケットベルは、好きなときにメッセージを送信することができ、確実に相手に届く一方で、受信する側も好きなときに受信することが可能であり、中西新太郎の言葉を借りれば『『距離』が保障された道具』(p. 88) なのである。それを使用している限りにおいて他者からのまなざしに拘束されることはない。

更に、大平健がイメージするように「双方がコミュニケーションの第一歩を相手に委ねてしまうことができる、いわば“受け身になるための道具”」(大平) であるため、自分から積極的にコミュニケーションの相手を作ろうとしなくても、勝手にある程度の友人ができていく。しかも、ポケットベルが持つ匿名性という特質は、そのような友人と「いくら親密になっても、いつでもリセットできる関係」(富田 p. 23) を成立させる。若者は、友人を獲得すると同時に、他者を拒否する自由をも獲得するのである。

一方、携帯電話もまた、ポケットベル同様、相手との距離が確保されており、出たくなければ出なくてすむという選択の自由と主体性が保証されている。また、特定の他者を作り出し、彼らを無意識に拘束できる。しかし、携帯電話とポケットベルには決定的な違いがある。携帯電話は、コミュニケーションする対象が自分の知り合いに限定されるため、相手を常に特定の他者として意識させられる。つまり、ポケットベルとは違い、誰とコミュニケーションしたのかが重要なのである。したがって、携帯電話は自身と他者の双方が徹底的に拘束される。だが、既に述べたように、この拘束は、相手との空間的な距離によって、拘束している側がその事実が無意識でいられるという特質を持っている。携帯電話は、まさに、他者を拒否する自由と他者の拘束という二重構造を体現したメディアツールなのである。したがって、携帯電話は恋愛のコミュニケーションを舞台にして、その有効性をフルに発揮している。

これに対して、ポケットベルでは不特定の他者とのコミュニケーションが可能である。この匿名性はポケットベルの特性として説明されることが一般的である。重要なのは、この特質によって、メッセージの発信者を匿名の存在のまま置いておくことも、時にはまったく別の人格を発信者に主観的に付与することも可能だということである。ポケットベルを文化グッズとして利用している者の中には、ポケットベルを通して自分の周りにまったくの虚構の世界を作りあげている者もいる。その意味で、ポケットベルのもつ利用者に自由と主体性を保証する機能は際だっている。だが、逆に他者を拘束する機

能に関しては必ずしも十分ではない。現実の他者を、匿名の他者、虚構の他者に代えてしまうように、それは他者の存在そのものを主観化してしまうのである。

一方、携帯電話もまた若者のコミュニケーションにとって機能的に十全ではない。携帯電話は、他者を常にスペシフィックな存在として認識することから、それ自体によって友人を増やすことができないからである。携帯電話は、コミュニケーションの質的な規範を満たすが、その前提となる友人の数を確保することには徹底的に無頓着なのである。第1章で確認したように、携帯電話を所有している若者は、もともと積極的に友人関係を持とうとする社交的な若者たちであり、だからこそ携帯電話を使いこなせるのである。その意味では、携帯電話は、文化ツールという観点に限定して考えるならば、多数の友人がいることを所有の条件にする排他的な（すなわち特定の文化をもつ若者たちだけが所有できる）メディアツールであると言えるかもしれない。そのため、他者を一方的に拒否できる自由と他者を一方的に拘束する権利という二重構造を操作することを可能にする現代的なメディアツールへの関心の高さに比べ、実際に携帯電話を所有している割合はまだ低い。そこには、携帯電話を所有することへの経済的な困難だけでなく、それを所有するための前提である友人の数という条件を満たすことの困難さがあるのではないだろうか。

お わ り に

本稿では2つの質問紙調査の結果を手がかりに、現代の若者が作りあげているコミュニケーション世界について検討してきた。

メディアツールはそもそもコミュニケーションを得意とする一部の若者に、ある面ではコミュニケーションツールとして、またある面では文化グッズとして積極的に受け入れられている。とりわけ重要なのは、それが彼ら一人ひとりのアイデンティティを表示する指標として機能していることである。それ故に、それは、すべての若者にとって規範的な価値を有している。

もちろん、近年若者の文化として特に注目を

集めている携帯メディアは、すべての若者に所有されているわけではないので、携帯メディアが現代の若者のコミュニケーションスタイルを規定していると単純に考えることはできないだろう。けれども、電話、コードレス電話、ポケットベル、携帯電話と、新しいツールが若者の世界に入り込んでいく度に、彼らのコミュニケーションスタイルは、それらを活用する形で、その規範を変質させている。そうした中で生み出されているのが、現在の彼らの友人関係であり、恋愛関係なのである。この2つについて得られた仮説をここで繰り返すことはしない。ただし、次のことを確認しておくことは必要だろう。

今、若者に特徴的なことは、コミュニケーションにおける自己に対する関心の大きさである。彼らはコミュニケーションの中で、自由や主体的であることを要求し続ける。携帯メディアの機能は部分的に若者のこうした志向性やコミュニケーションスタイルに合致しているのである。若者は携帯メディアを使用することで、コミュニケーションにおいて他者への優位を確保し、そのコミュニケーションを主体的に操作することが可能になる。更に若者は彼ら自身のこのコミュニケーションスタイルに無自覚でいられることで、自己への関心を他者によって損なわれずに保持できる。これらの機能はおそらくすべての若者に共有されたニーズと考えることができる。にもかかわらず、それがこれまで一部の若者の文化グッズとして評価されてきた背景には、コミュニケーションスタイルの文化表示機能によって、メディアツールの使用に特別な意味が付与され、結果的にすべての若者がそれを使用することが抑制されてきたことがあるだろう。しかし、携帯メディアが現在の若者にコミュニケーションを操作することを保証するものであるならば、携帯メディアを潜在的に必要としている母集団は、実際に所有し使用している若者の数をはるかに上回っていると考えてよいだろう。したがって、彼らはきっかけさえ得れば、文化差の垣根をいとも容易く越えていくにちがいない。このことは、この一年の状況の変化が証明している。しかし、彼らがその使用を日常的なものにしたとき、若者は文化

的差異を表示する新しい指標を必要とすることになる。携帯メディアを用いたコミュニケーションの中で、新たな文化表示機能を探すことに駆りたてられる潜在的な動機もまた同時にそこに作り出されているからである。

註

- 1) なお、今回の調査結果では、一部の項目を除いて、高校生と大学生によるコミュニケーションへの認識には、ほとんど有意差が見られなかった。そこで、本稿では、特にその差に言及する必要のあるものを除いては、基本的に高校生と大学生を区別せずに彼らを「若者」と一括りにして考えてゆく。
- 2) 電話依存度の強さは以下の方法で判断した。まず6つの項目、「深刻に悩んでいる問題」「他人の噂」「その日の出来事」「建て前を抜きにした本音」「好きな人への告白」「相手が傷つくかもしれないこと」を示し、「会って話すか電話で話すか、どちらの方が話しやすいか」を尋ねる。選択肢は「会って話す」「どちらかというと話す」「どちらとも言えない」「どちらかというと電話で話す」「電話で話す」の5段階とし、6項目に対する回答を点数化する。点数は、「会って話す」から順に、0点、1点、2点、3点、4点とし、総合得点を算出する。そして、この総合得点が平均点より高い人を「電話依存型」と呼ぶことにした。なお、ここでいう「電話依存度」は、電話を利用する頻度や通話時間の長さを基準にしたものではないことを断っておく。
- 3) これはちょうど、認知心理学の観点から青年期の発達段階の研究を行ったL・コールバーグが青年期の他者との距離の取り方として指摘した倫理的相対主義に重なる。コールバーグはこうした自分主義的な他者の判断の尊重

を、4 1/2 段階として青年期の特質として発達段階のひとつに位置づけている。

4) 1996年11月3日放映

参考及び引用文献

- ベンジュミン, J.『愛の拘束』(寺沢みずほ訳) 青土社 1996
- ダック, S.『フレンズ スキル社会の人間関係学』(仁平義明監訳) 福村出版 1995
- フィッシャー, H. E.『愛はなぜ終わるのか 結婚・不倫・離婚の自然史』草思社 1993
- ガンバート, G.『メディアの時代』(石丸 正訳) 新潮選書 1990
- 門脇厚司『社会化異変の諸相』(門脇他編『「異界」を生きる少年少女』東洋館出版社) 1995
- 清永賢二『漂流する少年たち—非行学深化のために—』恒星社厚生閣 1997
- 森永卓郎『〈非婚〉のすすめ』講談社現代新書 1997
- 中島 梓『コミュニケーション不全症候群』ちくま文庫 1995
- 中西新太郎『やさしい・面白い・かわいい』(中西新太郎編『子どもたちのサブカルチャー大研究』学芸旬報社) 1997
- 中野 収『メディア人間 コミュニケーション革命の構造』勁草書房 1997
- 大平 健『やさしさの精神病理』岩波書店 1995
- 富田英典他著『ポケベル・ケータイ主義!』ジャストシステム 1997
- 山田昌弘 a『ゆらぐ恋愛はどこにいくのか 恋愛コミュニケーションの現在』(『ポップコミュニケーション全書』PARCO 出版) 1992
- 山田昌弘 b『結婚の社会学 未婚化・晩婚化はつづくのか』丸善ライブラリー 1996
- 吉見俊哉・若林幹夫・水越 伸著『メディアとしての電話』弘文堂 1992